

研究ノート

発達における「自我同一性」概念の再検討 ：「同一性」と「同一化」概念をめぐって

久保田 まり*

Reexamination of the Notion of “Ego-identity” in Development: Concerning the Concepts of “Identity” and “Identification”

KUBOTA Mari

This study aims to relativize the notion of “ego-identity” proposed by Erikson as a psychosociological developmental task during adolescence.

For that purpose, I investigated the concepts of “identity” and “identification” and examined the condition of self/ego in human development, using the ideas of “non-identity” by T. Adorno, “élan vital” by H. Bergson and “rhizome” by G. Deleuze.

Moreover, from the developmental aspect, I considered “sameness” and “continuity” in Erikson’s “ego-identity” and indicated that, in the investigation of ego-identity, it is effective to incorporate the following opposite concepts: non-identical matters, diversity, and fluidity.

目 次

1. エリクソンの自我同一性 (ego-identity) 概念について
 - 1.1 自我の斉一性・連続性と社会的な承認の確信
 - 1.2 過去の同一化から新たな同一性の形成
 - 1.3 心理社会的モラトリアム
 - 1.4 エリクソンの心理・社会的発達における前提
2. 「同一性」「同一化」概念の整理
 - 2.1 「AとBは同一である」という同一化と差異化
 - 2.2 アドルノにおける非同一なもの
3. 自我の斉一性・連続性と多様性・複数性
 - 3.1 斉一性・連続性の基盤
 - 3.2 多様性・多方向性の基礎
4. まとめ

キーワード：自我同一性 エリクソン 非同一なもの エラン・ヴィタル リゾーム

Keywords :

* 東洋英和女学院大学 人間科学部 教授
Professor, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

1. エリクソンの自我同一性 (ego-identity) 概念について

1. では、まず、エリクソンの自我同一性の概念について、自身の著書『アイデンティティとライフサイクル』(1959/2011)の内容に基づいて確認していく。

1.1 自我の斉一性・連続性と社会的な承認の確信

エリクソンは、青年期の心理社会的な発達課題として「自我同一性」の確立を提唱している。子どもがやがて青年に成長する中で、「未来に向かって自分が確実に学び、歩んでいるという確信」や「現実の中で明確な位置づけを持った独自の自分に発達しつつあるという確信」を感じる時、その感覚が自我同一性である、とエリクソンは述べている。このことは、自我を統合する秩序としての斉一性 (sameness) を有し、且つ、過去からの時間的連続性 (continuity) を保つ一貫した存在である、という<主観的実存的な意識>の確立を意味するが、エリクソンによれば、それだけでは狭義の同一性ではない。彼は、「蓄積しつつある自我同一性と私が呼んだものは、属する文化の中で意味をもつ達成に対する心からの一貫した認識を(その青年が)受けることによってのみ、本物の強さを得る」と述べ、「自分独自の生き方が集団アイデンティティの求めるライフ・プランと一致しているという自覚」や「(青年が)自分自身に抱いている概念と、属している共同体がその青年をどう認識しているのかを調和させる」ことが自我同一性の真の確立には必須であると述べている。つまり、独自の存在者として自分が、他者や社会とつながりを持ちながら、そこから確かな承認を得ているのだという<社会的受容感>を獲得することこそが、青年の自我同一性を根底で支えていると言える。

このようなことを踏まえた上で、青年にとっての具体的な自我同一性 (の確立) とは「自分は、他の誰ともまがうことのない唯一無二の一貫した存在であり、また過去から現在まで時間

的に連続した同一の存在であり、さらに、その自分は未来に向かって有効に歩みつつ、その未来は限りなく開かれている」という実存的な自己意識や未来時間への展望と、「このような自分の生き方や人生設計、あるいは経験に対する独自の対処の仕方は、仲間や所属社会から認められている型のひとつであり、そこからは確かな是認が与えられている」という内的確信や現実感から構成されると言える。

このように、エリクソンが描いた青年期の「自我同一性の確立」とは、独自の存在者としての認識の確立と、同時にそれを所属社会への同一性につなげていく心の作業を意味し、ここに至って、青年は、まさに自分のものであり、同時に他者にも承認されるような「人生のテーマ」を見出していく (栗原, 1981)。

1.2 過去の同一化から新たな同一性の形成へ

このような自我同一性の確立は、子ども時代よりつくりあげられてきた<自分>への再吟味と再統合を必要とする。

エリクソンは、「子どもたちは、それぞれの発達段階に応じて、現実であれ空想であれ、彼ら自身が最も直接的に影響を受ける人々の部分的特徴と同一化する」と述べているように、人は子ども時代から(親を中心とする)自分に影響を与える様々な他者や、架空の人物をも含む理想の対象に部分的に同一化していく中で、次第に<自分>をつくりあげていく。しかし、この時期の同一化の多くは、無批判的な取り入れや模倣からなる<借りものの自分>の要素が濃く、その意味では、周囲の影響下で他者によってつくられた<自分>であるともいえる。しかし、思春期を迎え、身体的な変化に伴う、今までの自分との不連続感や違和感は、「改めて、自分とは何者か」「この自分は他者にどのように認識されているのか」「自分はこの先、どこに行こうとしているのか」「この社会の中のどこに位置付けられるのか」というような自己懐疑的な自問自答の連鎖を呼び起こし、ここにおいて<自分壊し>と<自分探し>への長い道程

が始まる。この過程は、他者の影響からなるべく離れ、自分独自のやり方で自分をつくりあげようとする心の働きであり、同時に、所属する社会や時代の要請に適合する方向で自己の歩みを定めていく作業でもあるとされている。

そして、エリクソンは「自我同一性という形で生じつつある統合は、子ども時代の同一化の総和を超えたものであり」「青年期の終わりに確立する最終的な同一性は、過去のいかなる人々との同一化であれ、それを超えたものとなる」と述べているように、この心の作業は、幼児期以来の複数の他者への同一化の諸断片を整理し、取捨選択し、新たな器のなかに統合する抜本的な心の作業であり（村瀬、1995）、その結果、断片の総和以上の＜新しいゲシュタルト＞が再生されると考えられる（Erikson、1959/2011）。

1.3 心理社会的モラトリアム

この時期、「社会は、個人の求めに応じて、子ども期と大人期の間に、ある程度公認された段階、即ち制度化された心理社会的モラトリアムを提供し、この期間中に（青年の）内的同一性の永続するパターンが相対的に完成するよう予定されている」と述べられているように、青年は社会の中に自分らしさを定位できる＜適所＞を見出すまで、大人社会で課される義務や責任を免除され、猶予が与えられた時空間において、＜役割実験＞と呼ばれるような主体的な自我活動を行いながら、内的同一性を確立させていく。それは、未知の可能性を試すために様々な自分の在り方を実験的に試行しつつ、自分らしいあり方を体験的に見出し、絞り込んでいく一連の試行錯誤であり、ときには危険を覚悟しつつも＜思い切って＞環境に挑戦していくという人生への冒険的態度をも伴う。そしてそれは、青年にとっての精神の碇泊点と内面の秩序を与えてくれる確固とした価値体系の飽くなき探索ともいえる心の作業である。

その結果、社会のある特定の場所での＜適所（自分だけのために作られたかのように思える

ニッチ）>を見出すことのできた青年は、自我の内的斉一性・連続性だけでなく、社会との接続感の確かな感覚を獲得していく。

1.4 エリクソンの心理・社会的発達における前提

以上のような青年期の自我同一性概念を含むエリクソンの代表的著作『アイデンティティとライフサイクル』が出版されたのは1959年のアメリカにおいてである。第二次世界大戦の戦勝国であるアメリカの1950年代は、黄金期ともよばれ、経済的には物質的繁栄（大型家電、テレビ、自家用車）をもたらし、また音楽や映画など娯楽としての大衆文化も発展し、表面的には平穏であるかのようにだったが、政治的には対ソ連の冷戦体制による全体主義的国家であった。1960年代初頭は、若きケネディ大統領の指揮下、希望と活力がみなぎり、経済的にも豊かな「強いアメリカ」を象徴し、世界をリードする高度成長を示していた（しかし、経済的豊かさを享受したのは、白人中流層であり、人種差別や貧困問題が背景にあるのだが）。

このような時代の下で、強いアメリカの未来を担う青年たちの「自律的主体的自己の発達」を目指しているエリクソンの発達理論（杉本、2001）は、同時に、国民国家や共同体、産業社会への同一化をも前提としていえると考えられる。

エリクソンによれば、「青年期の社会的課題とは社会のより広範な領域から与えられる役割に従うこと」であり「同一性の形成・・・その新しい形態は、社会が若者を同一化し、即ち、その若者をそう成るべくして成った人として、また、その在り方が当然と認められる人として承認する過程に依存している」という。さらには「同一性を探し求めている若者は、成功したものは最善なる者としての義務を背負わなければならないこと、つまり、国家の理想を体現しなくてはならないことを確信しなくてはならない」と述べている。

このように、エリクソン理論には、人（青年）

は何らかの共同体（国家、民族、地域社会、職場等）の中に自らを位置づけ、また共同体から位置付けてもらうことによって初めて「自分」になれる（西平、2011）、という主張が強い主旋律として響いており、それは黄金時代のアメリカの全体主義的な時代精神とも一致する。つまり、エリクソンの提唱する青年期の同一性確立とは「自我同一性」と「集団同一性」とのほとんど完全な表裏一体化を意味し、青年の「独立への物語」であると同時に「帰属への物語」でもあると言える（小田、2010）。

2. 「同一性」「同一化」概念の整理

1. では、エリクソン理論に基づいて「同一性」「同一化」という概念を以って、青年期の心理社会的発達について言及した。2. では、これらの概念について、特にアドルノの代表的著書『否定弁証法』（1966/1996）に基づき、彼の「非同一性」概念に照らし合わせて、検討してみたい。

2.1 「AとBは同一である」という同一化と差異化

「アイデンティファイ (identify) には「AとBは同一である」という意味がある。

「AとBは同一である（同一とみなす）」という概念整理、即ち、あるものと他を区別して把握し非同質なものは差異化する、という認識の方法は、混沌とした現実世界に対峙する我々を「明晰判明」な「合理的判断」へと導く基本的な第一歩である。「感覚に触れてくる多の内に<一>を求めるのは、人間理性の本能とでも言うべきものであり、それによって世界の多様な存在や出来事の理解は容易になり、人間が世界に対処する道が開ける。もし、<一化>する人間の理性の働きがなかったら、多様性の細部に途方にくれ、了解できない」（坂口、1996）とあるように、我々は、同一化・<一化>という情報処理や概念整理により、現実という多様性のカオスに翻弄されずにすんでいる。ピアジェ

の発生的認識論では、（個々の具体的事物にとらわれず、それらに共通する）一般性・普遍性を抽象し、その抽象的な概念を操作して一貫した論理体系を組み立てることが可能となる「形式的操作段階」が知的発達のゴールとされているが、それは「同一化」と「差異化」という認識方法によって、可能になると考えられる。

ところで、このような概念的認識の主体は、個別個人の「主観」ではなく、実は（むしろ、そうした個々人のもつ偶然的・個別的なものを切り捨てた「一般的他者の主観」とも言うべき）「メタ主観」であると考えられる（山本、1989）。もともと、抽象的概念とは、偶然性、個別特殊性を捨象し、普遍一般化を通して規定されるものなので、個人的な経験やイメージは、理論の概念的体系からは捨象されるのであり、よって、概念認識における個人とは、あくまでも「個別の主観を交えず」「論理的客観性＝メタ主観」に同一化することが求められる（山本、1989）。

ここで、前述のように、（ピアジェによる）知的発達の最終段階である「形式的操作段階」が抽象概念の論理的操作可能性を意味するならば、それは、「具体的な個別の事実・現実から、具体性を捨象し、概念化し、論理的体系の中に包摂すること」および「メタ主観・論理的客観性に自己を同一化すること」を意味する（山本、1989）。

しかし、<一化>されたもの（何らかの原理や法則、概念）から枝葉が派生するという認識の方法は、世界が連続的で断裂のない統一体であることを前提としており、即ち「同一性への指向」が暗黙の前提とされているとも考えられる（山越、1988）。そこで捨象される「非同質なもの」「概念に回収されないもの」、即ち「こぼれ落ちた個別性・具体性」は浮遊したままなのか？

このように考えると、概念とは、人為的・恣意的なある基準を設定し、それに照らして共通性・同一性を備えるものを囲い込み、その同一性を共有するものと非同質なものとの間に線引きをし、世界に輪郭あるまとまりを与えるた

めの認識操作の道具に過ぎない、とも考えられる（藤野,2000）。このことに関して、ニーチェは、有名な木の葉のたとえを引き合いに出しながら「概念はどれも同じでないものを同一化する」と述べている。即ち、本来、ある一枚の木の葉はどれ一つとして同じものが無い独自の木の葉であるのに、「木の葉」という概念に同一化されることにより、個々の木の葉の特異性や差異は全て捨象される。つまり、概念による同一化（包摂）とは、多様な事物を共通点・標準型に基づいて「括り」、個々の特殊性や差異は切り捨てられ、共通点をもたないものはすべて「非同一・異質」なものとして排除することを意味する。このように、理性による概念の認識とは、事物を固定し、一様性・同一性を原理として全てを把握する思考様式であり、こうした精神の同一性とその相関物としての自然の統一性の下では、人間や自然の質的豊穡さは屈服せざるを得ない（Adorno,1966/1996）。

2.2 アドルノにおける非同一なもの

しかし、これに対して、アドルノは「認識とは、決して個別の事物・事例を重ねて、その一般的共通性を高めていくという一方向的な加算の運動プロセスではない。または、数少ない個別個物からジャンプして、一般的普遍性を暫定的に仮設する、という性急さでもない」と語る。アドルノの認識様式（否定弁証法）は、個々の対象とそれらの概念との差異のなかに同一性を求めようとするのではなく、それどころか同一性を疑うのであり（小牧,1997）、異なるものを異なるもの（非同一なもの）としてあらしめ尊重すること、包摂・同一化・抽象化の結果をその都度具体的個物に照らし合わせて再検討しなおすことの徹底である。そして、このような同一化と差異分化との往復運動を通した前進と「差異への能力（非同一なるものの掬い取り（救いとり）」こそが理性的反省であり、理性の力であると考えている。あらゆる特殊な諸原理を自分の内に含むということが真の哲学の原理であり、真の理性的認識の態度であるとしたら（山

越,1988）、まさに「否定弁証法」はそれに該当するといえる。

理性的反省として、個人が「メタ主観」に同一化・同調することをやめ、自分の内の（学問的客観や既存の価値体系、規定された概念への「同一化」に抗う）「非同一なもの」に気づき、内なる不協和音に心の耳を傾けるとき、アドルノはそれを「主体の中の自然の回想」と呼んでいる。

自我同一性は決して青年期固有の課題ではなく、その後の生涯に亘って再構成され続けるものであり、それは動的な「個性化」の過程でもあることを考えると、「主体の中の自然な回想」は新たな覚醒を促す重要な契機となるのではないだろうか。

3. 自我の斉一性・連続性と多様性・複数性

「アイデンティファイ（identify）」には、もう一つ「AをAとして同定する」という意味がある。3. では、このことについて、自我同一性概念と関連づけて検討してみたい。

3.1 斉一性・連続性の基盤

「AをAとして同定する（把握する）」とは、それ以外のものとの明確な境界を確立することのみならず、それ自体に内的一貫性と連続性があることをも意味する。同一性確認の作業は個人のレベルでも集団のレベルでもなされ、前者はエリクソンの自我同一性、後者は国家的あるいは民族的同一性等を指し示している。つまり、「AをAとして同定する」とは、複数のものの間に、あるいは一つのものについてであればそれが抱え込み得る複数性の内に斉一性、連続性、統一性という内的同一性を確認することである（藤野,2000）。そのことは、多様性の一切を包摂する一つの枠組みを構築すること、未分化から分化されたものを一つの統合体として確立すること、と考えられる。

ところで、自我同一性における斉一性・連続性の基盤や核となるものは、乳幼児期の養育者

との二者関係を通して形成されると考えられている (Erikson,1959/2011;Stern,1985/1989)。例えば、乳児期の心理社会的発達課題と危機である「基本的信頼感／不信」は、後年、自分が関与できる世界とそうではない世界、自分につながる価値観とそうではない価値観を取捨選択し、内的価値観を統合していく際に重要な機能を果たす。そして、「自分は自分である」という確からしさの程度は、幼児期の心理社会的発達課題である「自律性」の獲得の程度にその根をたどれることが指摘されている (Erikson,1959/2011)。また、乳児は対人的関わり合いを通して自己不変要素を同定していき、「自己と他者が各々別個の、境界をもって独立した、単一で一貫したまとまりのある身体的・知覚的・情緒的存在である」という感覚 (中核自己感) を持つに至ることが示されている (Stern,1985/1989)。中核自己感の形成における自己不変の要素として、スターンは、自己一発動性、自己一貫性、自己一情動性、自己一歴史性 (歴史的連続性) を挙げている。

また、子どもにとって、情動とは自己体験に連続性を与える最も重要な機能を有していることが指摘されており、特に (前言語的段階の) 人生早期では、情動とは「自分は何者であるか」 (自己不変要素) を規定する体験にまとまりと連続性を与える“接着剤”であり、それはその後の自己の同一性と連続性の感覚につながっていくものと考えられている (Atwood&Stolorow, 1984; Emde,1989;Emde& Buchsbaum,1990;丸田,1992; Stern,1985/1989)。例えば、乳児は、身近な他者 (母親、父親、祖父母、兄姉、保育者等) との関わりを通して様々な文脈の中で、その都度、他者との情動的交流を体験する。この場合、場所や文脈、相互交流の相手が変わっても、そこで得られる“楽しい”“興奮する”“嬉しい” (もちろん、同時にネガティブな情動も含めて) という乳児の情動体験の質は、文脈や相手を超えて共通している。このように、他者との情動的交流を通して得られる「情動体験の連続性」は、“文脈が変わっても自分の情動体

験は不変である”、さらには“時間・空間を超えて自己は不変である”という自己の斉一性と連続性、内的同一性についての最も根源的な感覚を支えている。

3.2 多様性・多方向性の基礎

このような斉一性と連続性を中核に保つ自我の同一性を (あるいは人の自己保存を) 脅かすものとしては、一つは外部の異質性、二つ目は内的同一性を乱す内部の分裂や拡散、三つ目は予測不能な変化・変容などが挙げられよう。

ところで、自我とは精神分析学の創始者フロイトが編み出した概念であり、人間の精神をエス・自我・超自我と分析し、その中で自我とはエス・外的現実・超自我の間で折り合いをつけ適応をはかるための調整役であり、それだけに不安定で脆いものでもあることが示されてきている。アドルノや彼の盟友ホルクハイマーは、フロイトのこれらの概念に注目しているが、それは、フロイトが、「人間の精神とは、自我はその単なる表玄関に過ぎず、いったん自我の検閲と調整が弱まると、底知れない潜在的可能性を孕んだ何ものかである。」ということを示唆した点にある (藤野,2000)。そして、アドルノらが希望を託しているのは、むしろ内的同一性を脅かしかねない欲動のマグマ (エス) の方なのであり、自我によってかろうじて維持されている同一性などというものには (その人の) 潜在的可能性に対する単なる抑圧の働きしか認めていない (藤野,2000)。内的同一性の維持を通して確保される自我の同一性よりも、その同一性を揺さぶり動かすものに、より期待と可能性を向けているのである。ホルクハイマーは、「自我をこらえて保つための骨の折れる努力というのが、どの段階においても自我につきまとう。そしてしゃにむにそれを維持しようとする断固たる態度には、自我を喪失してしまうことへの誘惑が手に手を携えているのだ」と述べ、目的意識的・現実適応的で同一性を維持し続ける自我の機能よりも、分裂や逸脱、予測不能な変化可能性にこそ、人間の生成発達のポテンシャル

を求めている。

ホルクハイマーと同様に、アドルノにとって、現実的なものの一切の固定化、永続化、普遍化は全く意味を持たず、個体（の差異性・特殊性）は動的で、絶えず自身を越境していく運動体として位置付けており、このメンタリティがアドルノの非体系性、流動性、微分性の由来するところであると言われている（小牧,1997）。

他方、ベルグソンは、生命（という現象）とは固定的の把握ができず絶えず逸脱する多様な錯綜体であり、明晰な分類や区分に対して「常に偏差を含む変種を予見不可能な形でつきつけ、区分自身を無力化させてしまうような、動性を孕む多様体」であり、そのような多様体の予見不可能性、逸脱性を生み出す力に「エラン・ヴィタル」という名を与えている。エラン・ヴィタルの根源的な運動性に支えられ、質的多様性を確保しつつ不断の生成として現れる生命現象は、それ自身、等質性・同一性に抵抗し、異質性を孕む。そして、生命体は、エラン・ヴィタルの運動による様々な分化・分裂の成果をその身体に複合的に内包しつつ、その存立を保っている（檜垣,1993）。つまり、我々生命体の特徴とは、その内的多様性であり、ぶれを含む予見不能な動性であり、偶然性に満ちた不連続的な変容化可能性である。そして、生命を最も享受することは、固着せる己の貧しき内実を廃棄し続け、その生命体に存する潜在性の未だ見ぬあり方での顕現を図り続けることである（檜垣,1993）。

さらに、ベルグソン哲学に依拠しているドゥルーズも、個体の流動性、動的生成について、鮮やかに軽やかに描出する。ドゥルーズによれば、我々には主体という中心をもつ自己などはなく、形成されることも、維持しようと固執する自我同一性などどこにもないし、かけがえない個の実体など何もなく、ただ、個体は未決定のうちに絶えず流動し、絶えず分散、変容する多様体である、という。即ち、個体は同一性の枠には収まりきれず、多数多様に姿を変えつつ生成し続けるのである。そして、もし、その

個体自体の価値や特異性があるとしたら、それは絶えず差異化を表現する生成の現場に浮かびあがるもの、顕在化する何かに見え隠れするものであると考えられる（檜垣,2002）。

ドゥルーズはこのような生の様態を、定点や一定の方向を持たず、多方向に分散する「リズム（地下茎）」に投影している。

『樹木やその根とは違って、リズムは任意の一点を他の任意の一点に連結する。そして、その特徴の一つ一つは必ずしも同じ性質をもつ特徴にかかわるのではなく、それぞれが実に異なった記号の体制を、さらには非・記号の状態さえ起動させる。リズムは<—>にも<多>にも還元されない。……それは統一性からなっているのではなく、さまざまな次元から、あるいはむしろ変動する方向からなっている』（Deleuze&Guattari, 1980/1994）

地下茎は、もちろん流体ではないし、即席に出来上がったたり、すぐに消滅するものではなく、実体としてあり、それまでの伸長の時間的蓄積もあるが、しかし、「根付いて留まっているように見えながら、絶えず留まることを知らない」のであり、そこでは恒常性と流動性が対立しているのではなく、絡み合いながら共存している（小田,2010）。

4. まとめ

以上、エリクソンの自我同一性の概念に内包される「同一性」「同一化」に関して、「非同一般的なもの」（アドルノ）や「多様性」（ベルグソン、ドゥルーズ）の理論を引き合いにして、検討した。

エリクソン自身、あらゆる理論や概念が歴史的相対性を免れないことは自覚しており、自らの拠って立つ土台の相対性を反省的に自覚することは、エリクソンのものの見方の根幹である（西平、2011）。現代社会における人間の発達を理解する上で、自我同一性の概念の妥当性を検証し、また、エリクソンの生涯発達理論における一つひとつの概念を丁寧に検証することが、

発達心理学徒としての使命であると自覚している。

引用文献

T. W. アドルノ 1996:『否定的弁証法』(木田元ら訳) 作品社。

Atwood,G.,& Stolorow,R.D. 1984 : *Structures of subjectivity:Explorations in psychoanalytic phenomenology*. Hillsdale,NJ : Analytic Press.

G. ドゥルーズ/F. ガタリ1994:『千のプラトー』(宇野邦一ら訳) 河出書房新社。

Emde,R.N. 1989 : The Infant's Relationship Experience : Developmental and Affective Aspects. In Sameroff,AJ.,& Emde,R.N. (Eds.), *Relationship disturbances in early childhood*. New York : Basis Books.

Emde,R.N.,& Buchsbaum,H.K. 1990 : "Don't You Hear My Mommy?" : Autonomy with Connectedness in Moral Self Emergence. In Cicchetti,D.,& Beeghly,M(Eds.), *The Self in Transition:Infancy to Childhood*. Chicago : University of Chicago Press.

E. H. エリクソン 2011 :『アイデンティティとライフサイクル』(西平直・中島由恵訳) 誠心書房。

栗原彬 1981 :『やさしさのゆくえ — 現代青年論』 筑摩書房。

檜垣立哉 1993 :「多様体としての生命 — ベルグソンのエラン・ヴィタル概念を巡って」『駒澤大学文化』16号、p.113-136.

檜垣立哉 2002 :『ドゥルーズ — 解けない問いを生きる』 日本放送出版協会。

藤野寛 2000 :『アドルノ／ホルクハイマーの問題圏 — 同一性批判の哲学』 勁草書房。

小牧治 1997 :『アドルノ』 清水書院。

丸田俊彦 1992 :『コフォート理論とその周辺』 岩崎学術出版社。

森村修 2011 :「G.ドゥルーズの「多様体の哲学」(1) — 「多様体の哲学」の異端的系譜(3) —」『異文化』12号、p.103-131.

村瀬孝 1995 :『アイデンティティ論考：青年期における自己確立を中心に』 誠信書房。

F. W. ニーチェ :「道徳以外の意味における真理と虚偽について」『ニーチェ全集<3>哲学の書』(渡辺二郎訳) 筑摩書房

小田亮 2010 :「生活の場としてのストリートのために — 流動性と恒常性の対立を超えて」 関根康正編『ストリートの人類学』下巻 国立民族博物館調査報告81、p.489-518.

坂口ふみ 1996 :『<個>の誕生 — キリスト教教理をつくった人びと』 岩波書店。

D. スターン1989 :『乳児の対人世界 理論編』(神庭靖子・神庭重信訳) 岩崎学術出版社。

杉本裕司 2001 :「母性社会日本における道徳性の発達：青年後期をめぐって(前篇)」『熊本大学文学部論叢』70、p.31-45.

山越雅彦 1988 :「<同一性>イデオロギーのクリティーク」『社会学評論』第39巻1号、p.32-44.

山本泰生 1989 :「アドルノの「非同一的なもの」について」『ドイツ文学』83号、p.125-135.